
Pokemon&Panic

氷菓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P o k e m o n & a m p ; P a n i c

【Nコード】

N 7 1 5 6 X

【作者名】

氷菓

【あらすじ】

5年前にカントー・ジョウト間で起こった戦争。それは、ポケモン、人間を問わずに巻き込み、奪い、与えていった。ある人々はこの戦争を切欠に変わり始める。それは互いに干渉し、捻り合って、一つの未来を紡ぎ出す。そうして形作られた結末はハッピーエンドなのか、それともバッドエンドなのか――？

この小説はロゼシティというサイトのオリストを僅かに改変して転載したものです。

逃避行

【とある運搬トラック運転手の証言】

何だい？あんだ、こんな砂漠の真っ只中で。……あ？観光？ハッハッハ！！こんな死地のド真ん中で観光だと！？アッハッハッハッハッハ！！

敵国への情報工員ケースオフィサーの一員か？それなら止めたほうがいい、こっちの真正面から進入するには些か分が悪い、あっちも本気だからな。

ここから東にある山麓の食料供給ラインから忍び込んだ方がいい。間抜けにも痩せ細った奴隷を使つてやがる。苦もせず忍び込めるだらうぜ。

……何？違う？ケーシイのテレポートが暴走した？

そいつぁ災難だったな。なら説明してやる。ここはジョウトの45番道路、フスベと小つせえ村のワカバつて所をつなぐ山道だ。今カントーとジョウトが戦争しているのは、知っているな？

情けねえことにジョウト軍の勢力はカントー軍の奇策で弱体化しちまつてな。平地で唯一の道の26・27番道路の占拠を許しちまつたせいで一方的にカントー軍がジョウトに流れ込んでくる図式になつちまつたんだ。そのせいでジョウトの30%は焦土と化した。

そこで、さっきのワカバつて所や、その近くにあるトージョウの滝付近にキャンプを作つて防衛兼、敵の侵入を軽減する防壁の建設を担う奴らを年齢・性別問わずに送り込んでんだ。

で、俺がそこへフスベから食料や生活物資を送つたり……金次第で行きたくないのに、国に送られた哀れな奴らを『荷物』としてフスベに送つたりしてやつてんだ。

酷いもんだろ？今日も泥だらけの金を渡されて15、6歳程度の

奴を送ってやったぜ。

国はカントーにしてやられておかしくなっちまった。10歳にも満たない奴らに軍事的に改造させられたポケモンを握らせてるんだ。

トージョウの滝の近くでな、改造されたマルマイン入りのボールを持たされて、「危なくなったときに使え」と言われてからカントー軍の捕虜になった9歳のガキがいて、数分後にカントー軍の方から爆煙が上がった時には流石の俺も心が痛んださ。

この国の恐ろしさが分かっただろ？こんなところにいたら捕まって殺されるだろうな。「疑わしきは罰せよ」が、この国のルールの一つだ。

俺がフスベまで送ってやるよ。もちろん——金次第でな。

フスベ郊外

「やってられるかよ！」

15、6歳の外見をし、金色に黒を混ぜたような色の髪を持った少年がボールを岩にたたきつけた。

彼は二日前までトージョウの前線基地に所属していた。それが

意味することは死。

ここに配属されたものは、皆、敵の防護に討死し、生き残ったものはマルメイン入りのボールと共に敵の真ん中で爆死する。

少年——クレーブスは三日前に、何の冗談なのか自身の誕生日に、本部からバスデーケーキと、漫画に出てくるようなリボンに包まれたプレゼントの箱と共にボールを送られた。

そう、マルメイン入りのボールを。

その夜、クレーブスは指令長の財布を盗んで、運搬トラックの運転手に叩きつけてフスベへと渡った。

直に俺は指名手配犯となり、見つければその場で射殺されるだろう。

「逃げる……。俺は逃げ切つてやる！ カントーだ、カントーに行けばジョウトの指名手配は簡単に逃れられる！！ そうだ……。俺は生きるんだ！」

視線はシロガネ山、ここを越えればジョウトからカントーへ抜けられる。

高く険しい山脈はカントー・ジョウト共々、軍を侵略させるには全く適しない、せいぜい国境に高い鉄柵がある程度だ。

3年間戦地で過ごしたクレーブスには鉄柵の攻略法など算数のように心得ている。

それと共に——生来会ったことのない、父親の事を思い出していた。

『母さん、父さんは何処にいるの？』

昔、何気なく聞いた質問。父さんは死んだ、と死つてはいたが、

悪戯心で聞いてみた質問だった。

その質問に、母さんは暗い表情で答えた。

『クローブス……父さんはね……シロガネ山にいるのよ、あなたのお父さんはとても凄いポケモントレーナーだったの。それこそ世界一といってもいいほど……』

父さんは……彼は、シロガネ山で今も自分の相手を待っている。貴方はそれに答えられるだけのトレーナーになりなさい。それが……あなたの……息子としての使命よ』

母さんは死んだ。俺がこの国に捕らわれた時に、俺を庇ったせいで心臓を銃弾で貫かれて。

母さんの最期の言葉はこの時代に生んだ事に対しての謝罪だった。

昔の事を思い、僅かに涙ぐんだ。

三日後——シロガネ山脈

予想以上に早く、クローブスは山脈を抜けることに成功した。父の所在も確認したいところだったが、手持ちのポケモンがいない今の状態でシロガネ山に入るとは自殺行為といえよう。眼前にはトキワシティの道が真っ直ぐ進んでいる。関所もあるが、クローブスにとっては低いハードルだ。

おそらく二度と戻ることがないであろう故郷の方角を一度振り返ってから、クローブスはトキワシティへと歩を進めた。

武勇伝

【6年前のとあるゴシップ記事から一部抜粋】

さて、今回は現在のカントーチャンピオン、クオーツィオリーブ氏について語ろうと思う。

彼が今年、チャンピオンに初就任した日、失礼ながら皆様も、思わぬチャンピオンの座を手に入れるチャンスに心躍らせたのでは無いただろうか。

何せ、彼がチャンピオンに就任したのは、かの完全無欠の前チャンピオン、レッド氏の遺書に従っただけであり、レッド氏の実力を上回るとはとても考えにくい。

レッド氏は今から約三ヶ月前に消息不明となり、今月に入って死亡認定を受けた。

クオーツ氏とレッド氏の関係については公知されていない。血縁説が有力な説であるが、未だに仮説の域を出ていない。

……前座が長くなってしまった。それでは、クオーツィオリーブ氏について話を進めていこう。

前述のとおり、彼が就任したその日から、ポケモンリーグの挑戦者は爆発的に増えた。

その日から、私が今これを執筆している現在までポケモンリーグ挑戦者は124人、このうちチャンピオンまで進んだのは89人と記録にある。

しかし、しかしだよ、彼はこの89人を全員倒しているんだ、就任して一年、一ヶ月？いや、一週間も経ってないような新人が！

それもさらに凄いデータも入っている。彼は6体のポケモンのうち、この89人に対して最高でも一人につき2匹しか出していないという。ありえるのか？そんなこと！

一体何故そんなに強いのか？この記事を書いているうちに知りたくて知りたくて仕方がなくなってしまった。

私は一流のジャーナリストに頼み込んで、頼み込んで、頼み込んで、頼み込んで頼み込んで頼み込んで頼み込んで——
そして私は、有力な情報を得ることに成功した。

クオーツ氏の所持するポケモンは、何千匹、何万匹という卵の中から最高の才能のものを選出し、

その体質にあった調教、帝王教育、実戦経験を叩き込み、コンディションを極め、最高の道具を以て勝負に挑むという。その上で彼の恐ろしいまでの空間把握能力、予見力、知力、構成力が組み合わせられたあらゆるパターンの戦略を練ってくる。

彼は挑戦者に対して一切の容赦をしない、彼に敗れた者は二度とポケモンリーグに足を運ぶことは無いだろう。

私は彼がポケモンブリーダーの頂点であると確信している。そう、彼は紛れもなく『天才』だ。

との、話だ。

私はこの話を聞いて、こう思った。

『天才』——確かにこの話を聞く限り天才としかいえないだろう。だが、私は敢えて言おう、彼には『天才』よりも相応しい二つ名がある。

彼は——『育成中毒者』だ。

現在 ポケモンリーグ最深部

ここは狭い個室だった。

前の四つ——四天王たちの部屋に比べると派手な装飾もなく、どこにでもあるような、本当に普通な部屋だった。たった一つを除いて。

入り口から入って真正面に佇む巨大な玉座。

中世の貴族が好みそうなデザインの玉座は天井に届くほど長く、全体的に豪華な造りになっている。

だが、その玉座は埃を被り、数ヶ月ほど使われた様子は無い。

5年前、カントーとジョウトが戦争を始めた時、クォーツ・オリブはリーグを閉鎖した。

安全や、避難所としての利用などの目的もあったが、一番大きいのはオリブ自身の参戦にあるだろう。

オリブの戦闘に関する戦略の組み立ては芸術とすら言わしめた。そこでカントーはオリブを戦争の参謀に立てたのだ。彼の奇策はジョウトを確実に侵食していき、カントーの優勢を誘った。

だが、彼は僅か1年足らずで参謀から謎の失踪を遂げる。

ジョウトのスパイに暗殺されたのか、それとも彼自身の行動なのか。

ジョウトを蝕み、カントーを裏切り、海外の逃亡も統制された今、彼は一体何処へ消えたのか？

今となつては誰も知る由も無い――

明るい部屋

「イエーナ、クチバの戦争の状況は分かったか？」

棚の上、机の上、床の上、山のようにつまれた幾千もの書類の山の向こうの、窓辺辺りから、イエーナと呼ぶ女に問う男がいた。

整頓された机に向かう金髪の女は答える。

「クチバ戦争？ああ、ああ！ウォルナットやらイーオスとかが『中和』に行つてたよね！なっつかしいなー。あれ？「懐かしい」っていうほど昔の出来事だっけ？」

いや、よく考えたら2、3週間前か！まだまだ最近じゃん！何これ！若年性健忘症！？この年にしてアルツハイマーとか嫌だよ！？
ってあれ？私何聞かれてたんだっけ？ああ、そうそう！そのクチバ戦争の結果だったね！

えっとー、確か5日くらい前の十五時三十二分四十一秒の電話で八割のポケモンの『解放』に成功したって言ってた気がする！てか絶対に！

それでハーベストが七十二回目のプロポーズに失敗したって言うたけどあいつもそろそろ……」

相手の会話から必要な情報だけを切り取り、その他は軽く聞き流す。

そんな行動を取ることに男は既に慣れていた。

「そうか、それなら3日以内にはクチバは解決するだろう。後は下っ端に任せて幹部達に収集を掛ける」

「あいあいさー」

言うが早く電話を手に取り、戦線にいる幹部達に報告を開始する。男はこれがまた長電話になるであろうことを思案しながら、再び窓の外を見る。

窓の外には戦火と黒煙が見える。それは現在の戦争の景色。

正確に言つとこれは窓では無い、限りなく窓に近く遠近感を伝える3D液晶の一種であり、10種類の場所をリアルタイムで移すことができる。

液晶には僅かに男の姿が映りこんでいる。

長い銀の髪に、黒いコートを羽織った長身の男。その顔は無表情に近かった。

後ろからイエーナの声が聞こえる。

「——でさー、あ、そうそう、これはオリーブの指示なんだけ

— 24 —

研究者

【とある研究者へのダイレクトメール】

久しぶりだね、元気かい？

子供が生まれたと聞いてるよ。僕はまだ独身だけど、素直に祝福したいと思う。

さて、今日このメールを送ろうと思った真意を話そう。

私の研究所のメンバーがAPC計画の課題の一つ。『光子態』の人工的生成に成功した。

APC計画が発動して以来300年間、夢物語に終わるとされていた課題の一つが完成したんだ！

生成したのはトリアノン・イベリス。プラト大学の最年少卒業者さ。

彼女は天才なんだ、かのチャンピオン、クォーツ・オリーブとはまた別種のね。

かつて『光子態説』を提唱したトリアノン・オドラータ、それに原型態を加えた『二態説』を提唱したトリアノン・センプルヴェレンス。

オドラータを初めとする研究者一族トリアノン家、彼女はそれでも今の生物学を確立したセンプルヴェレンスに匹敵する天才だ。

私の頭は君が知っているとおり残念なものだ。とても彼女の明晰な頭脳を御しきれ自信がない。

そこでだ、彼女を君の研究所に送ることにした。私からの出産祝いだ。

君の研究所では光子態の書き換えについて研究していたな？
それが確立すればA P C計画は300年の時を経ていよいよ完成する。共に歴史に名を刻もうじゃないか。

それだけだ。それじゃあまた、年末に会いに行くよ。

カタン カタン

ここは、プラト地方の最北から最南を走る大陸横断鉄道。
それほど豪華な造りではなく、庶民的な内装で、価格も割とリーズナブルだ。

そんな列車の中に、トリアノン・イベリスはいた。

急に今まで通っていた研究所から、タمامシ大学に属する研究所に配属される旨を伝えられた。

所長からは、軽いホームステイと思ってくれ。と言われたが、正直今まで住んでいたプラトの地を離れるのはあまり気が進まず、よって今の彼女は機嫌が悪い。

窓側の長髪で黒髪の女は、ヘソ出しルックで迷彩柄のTシャツと、パンツルックのジーンズを履き、その上から短く改造された白衣を着ていた。

「光子態の書き換え……か」

光子態、それは通常見るポケモンのもうひとつの姿。

普通の方法ではこれを見ることは出来ず、進化の最中やモンスター

ーボールに入る瞬間などの特殊な状況のみ観測できる。

300年前にこれが発見されたのが、ポケモンの生物学の始まりといっても過言ではない。

光子態にはポケモンの情報がすべて含まれており、レベルが上がるにつれ、この数値は変動していく。

イベリスは、大学と研究所で、これについて研究してきた。

その過程で彼女は、生物学最大の栄誉、「オドラータ賞」を3つほど会得した。つまりは彼女はそれほどの天才なのだ。

光子態の書き換え、今から行く研究所はその研究を担っている
と聞かされた。

それは即ち、ポケモンのあらゆるステータスを自由に書き換え、
究極的にはポケモンの種類すら変えることが可能になるだろう。

そんな難問を前に、イベリスは窓を見ながらこう思った。

——意外と出来るんじゃないかな……それ

物見遊山

1632年 シンオウ地方 コトブキシティ

レンガ造りの住宅街に沿った石畳に、白熱灯の柔らかい光が当たって通行人をぼんやりと照らす。

今の時間帯は人通りが少なく、最近多い、馬車に轢かれるという事案の心配も無さそうだ。

そんな中、暗い表情を浮かべる一人の女性がいた。

彼女の名はミュンヘンベルク・ラナンキュラス。彼女はこの街の小さな新聞社に勤めていた。

もともと、その新聞社はい昨日、急成長を遂げたデイリーコトブキ（旧コトブキ新聞社）に吸収合併され、就職して僅か3ヶ月と、経験の無さが災いしたのだろう。

人数過多で彼女は今日付けで解雇される事となった。

理不尽な事この上無いが、抗議をしたところで自分のイメージが悪くなるだけで結果は変わらない。再就職の際に影響がある可能性も無きにしもあらずであり、彼女は何もいわず退散した。

何となく、このまま家に帰る気分ではなかった。

ぶらぶらと歩き、普段通る事の無い路地を曲がる。街路灯の光は届かず、向こうの大通りから漏れる光のみ見えた。

ガシッ

「ん？」

何かが足にぶつかった。目を凝らしながら足元を見ると、そこにあったのは――足。

自分のとは違う、足。

人が倒れていた。外傷は無く、恐らく酒を飲んだから、ここで力尽きて寝てしまったのだらう。

「あ……すみません」

恐らく聞こえていないであろう謝罪を言つと、足早にそこを立ち去ろうとする。

瞬間、男の目がカツと見開かれた。

ビクウツ！と体全体が震えるのが分かった。

相手は寝起き、ここは暗闇で顔は知られていないはず。それなら一目散に逃げ出すのが正しい選択だったはず。

だが、どうしてもそれが出来なかった。

この男の針のような雰囲気か足を縫い付けている、そんな感じた。

「これはすまない、中世の令嬢。私の不始末を詫びよう」

「え……？あ、いや、こちらこそ……」

あまりにも紳士的な振る舞いに面食らう。

『中世の令嬢』という言い方に違和感を感じたが、それは以後の会話で払拭される。

「私の名は、ディアルガ。信じるか信じないかは貴女の自由だが……ポケモンであり、時を司る神である」

「は？」

ディアルガの名は知っていた。

確かにそれは時を司る神であり、空間を司る神、パルキアと対極を成しているという話を聞いた事がある。

それに、この雰囲気や、言葉遣い、『中世の令嬢』という発言などもそれを証明するパーツとして説明できる。

だが、それだけでやすやすと信じるほどラナンキュラスは単純ではなかった。

「それなら完全な証拠を見せてください」

そう言うと彼は紳士的な笑みを浮かべて一言。

「承知した」

彼の掌が傍らにあるボロボロの木箱に触れる。

その瞬間、木箱は一瞬で腐り落ちた。そして、瞬いた後には、木箱は新品同然の状態に巻き戻っていた。

「凄い……」

「信用してもらえたかね？」

ラナンキュラスは素直に頷く。

そして、彼女の人生は次の言葉で大きく揺らいだ。

「私は今から約370年後の未来から来た。私の頼みに応じてもらえるのなら、君を時間旅行者として自由に生きさせる所存だ」

万屋

廃ビル4階

赤い髪の男が叫ぶ。

「いい朝だな！こんな昼は仕事に限る！いや、いつそ遊びに興
じてもいいかもしれないがまだ今日は平日だ！

我が社の社員旅行のチャンスはまだあと三日以上先だ！残念だ
ったなお前ら！」

背凭れの壊れた椅子の上に立ちながら、壊れた言動の男は30
人以上の人数を指差した。

性格には指ではない、その男は杖のごとき長さを持った猟銃を以
て彼らを指差したのだ。

すぐに銃を突きつけるのをやめると、今度はトリガーを中心に
人差し指でクルクルと回転させ始めた。

「さあーて、果たして今日はどんな仕事が来ているんだ？残念
だが、仕事が来ていないとの言い訳は一切受け付けない。

何故ならば今日は平日だからな！そんな事態になったらこの中の
誰かをこの壊れた椅子に締め上げて屋上から突き落とす仕事を思い
つくかもしれないぞ？」

社員達は社長と思わしきこの男の言動には慣れているのか、こ
の狂った理不尽にも大した反応は示さない。

立つのを止めて、椅子に座りなおした男に、南東の門に座って
いる社員が返事を返す。

「えーつとお……今日の依頼は3件ですね。『戦争用改造ポケ
モンの輸入』『南東の防壁の破壊』んで……ん？何だこりゃ『レジ

スタンス『R & a m p ; N』の壊滅』……？社長、これは」

「キャンセルだ」

社員が言い切らぬ内に社長が言葉を遮った。

「前半二つをキャンセルしろ」

極めて真面目な顔で言われたその言葉。それを言い終わつたとたん真面目な顔は悪意に満ちた満面の笑みに塗りつぶされた。

「ハリーアップだ！急いでてめえら銃を持て！残念だが、今の俺は非常に気分がいい！三十秒以内に各自用意出来なければ、俺は貴様らを歡喜の咆哮と共に胸を穿つだろう！！」

その言葉と同時に放たれた一発の銃弾は、正確に社員の間を抜け、倉庫の南京錠を破壊した。

迅速な動きで倉庫へと急ぐ社員達を尻目に、男はそばにいるポケモンに語りかける。

「祭りだ祭りだ！！カニバルよ、今日は貴様の好物の人間の生き血が飲めるぞ！残念だが今回は俺も参加するので俺が殺した奴は食うんじゃないぞ？

鉛毒になんかなられたら治療代が馬鹿にならない、俺の仕事が増えるだろう？いや……仕事が増えるということは今よりもっと人を殺せるからいいことなのか？

ああああ！！俺はカニバルの健康と欲求のどっちを優先すればいいんだ！？教えろお前！」

既に各自武器を取り終え、椅子に戻っている社員の一人に銃を向ける。

「カニバルの健康に関係なく仕事を増やせばいいのでは？」

「それだ！」

ガチリ、という音と共に再びその銃口から鉛弾が飛び出す。

「うぉぁぁ！」

音に驚いた社員は、椅子から転がり落ちるように回避行動を行った。

机に兆弾した弾は既に割れている蛍光灯の一部をさらに破壊し、あたりにガラス片に雨を降らせる。

「おつと悪い悪い！つい力が入っちまった、いや！違う！これはお前らが本当に今から戦場に行く覚悟があるか試しただけだ！

その結果お前らは一瞬でガラス片の雨を防ぐ事に成功しているじゃないか！合格だお前ら！よくやったな！」

蛍光灯の下辺りにいた社員達はノートやアルミトレイなど、最寄りの板状の物でガラス片をガードし、辺りになかったものはガラス片の届かないところまで避難していた。

誰もが不条理だと感じていたがそれを口に出すものはいない。抗議した場合の運命が分かっているからだ。

「さてさて？よく考えてみれば残念だが、俺たちはこのリリース&エ又何とかの場所を知らないではないか。

どういふことが説明してみろ！」

三度にわたり、社員に銃口を向けようとするが、今度は途中で中断する。

「いや……やっぱいい、カニバル！このリリース&エ又何とかの場所を探て来い！報酬は……最高の血肉だ！」

カニバルと呼ばれたウォーグルがすでに割れている窓から弾丸のごとき勢いで飛び去り、男はそれを銃声で見送った。

それから社員達を振り返り――

「OKOK！これで場所は特定したも同然だ。あいつの情報収集能力は人間の比じゃないからな！」

これから、この瞬間から、我が社はひっそりの大仕事に取

り掛かる！

こいつらの脳味噌を、目を、心臓を、肺を、腱を、小指を、頸動脈を！撃って撃って撃って撃って撃って撃ってまだ撃って！弾を補充してまた撃とう！

楽しいな！想像するだけで吐き気がするほど楽しそうだ！最近の微温湯仕事は俺を欲求不満に貶めた！

ああああああああああ！カニバルが帰るまで暇だからなあ！残念だが、今からそれらの依頼人撃ち殺して来るわ！留守番は任せたぞお前ら！」

こんな発言にも、社員は苦笑いを浮かべただった。

男は最寄の窓を銃のトリガーで叩き割り、そこから飛び降りるように出て行った。

器用に一階ずつ足を置いて、衝撃を和らげるように地面に着地すると、彼もまた弾丸のように走り去って行った。

男の後ろにある廃ビルの、一階と二階の間の壁にはスプレーでこう書かれていた。

『ビンヤードⅡスターグラス万社』、と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7156x/>

Pokemon&Panic

2011年11月16日11時08分発行